

寅さん歩 その14

東京に こんなところ-10



平野 武宏

首都東京は徳川幕府の江戸から明治維新へ、そして関東大震災・太平洋戦争の被災で壊滅から復興、1964年（昭和39年）の東京オリンピックによる街並み・交通網の再整備と時代と共にその姿を変えています。そして2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、更に近代的な姿に生まれ変わろうとしています。

「寅さん歩」で東京を歩き回っている寅次郎は「東京にこんなところもあるのだ!」と思わせる場所に出会い、感動しています。新シリーズとして取り上げ、紹介します。都民暦約4年の「寅次郎基準」で選んでおりますので、ご容赦下さい。最寄り駅は代表例です。

～ 大森の海辺は海苔のふるさとです ～

[大森海苔のふるさと館]

大田区平和の森公園 2-2

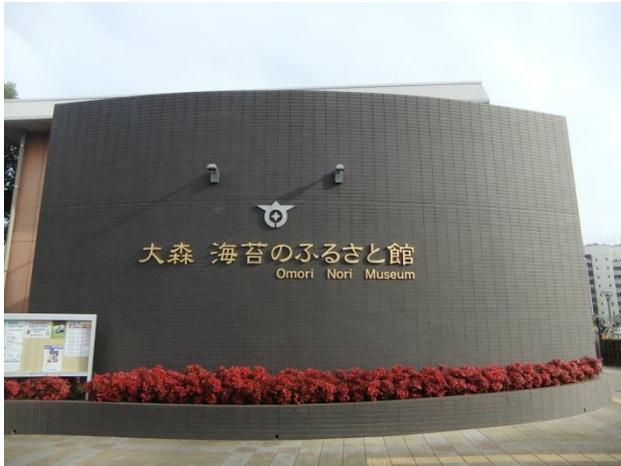
最寄駅 京浜急行 平和島駅

東京モノレール流通センター駅

案内によると『海苔づくりは江戸時代の享保(1716年～1736年)の頃から始まったと言われています。品川から大森周辺の海辺に「ひび」と呼ばれる粗朶木(そだき)を建て、その枝に育つ海苔を摘み取りました。特に浅瀬の広がる大森周辺は大きな産地として発展し、江戸時代の終わりごろ、ここから各地へと伝わり始めました。

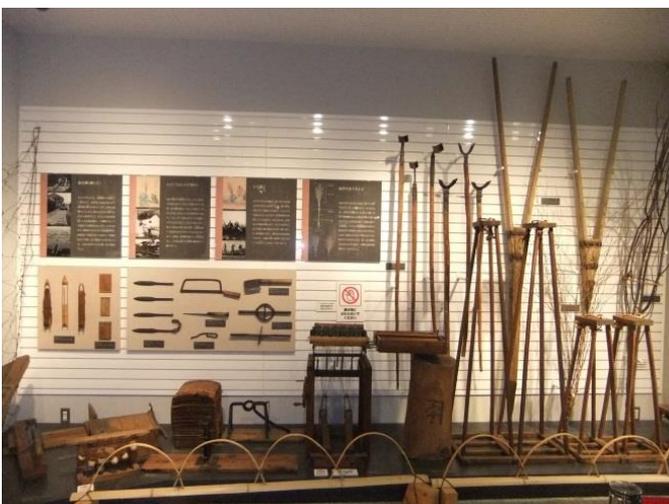
明治以降は各地で海苔づくりが行われるようになりましたが、大田区沿岸の海苔は質・量とも全国に誇り「本場乾海苔」と称賛されてきました。残念なことは東京都沿岸部の埋め立て計画に応じるため、昭和37年(1962年)12月に生産中止を決定し、翌年春にその歴史を閉じたとのこと。しかし江戸時代から培われてきた伝統は生産が途絶えても海苔の流通業の中で生き続けています。

大森周辺は海苔問屋が多く、現在も海苔流通の重要な拠点の一つになっています。海苔づくりの伝統文化を伝える文化財を展示紹介・体験できるため平成20年（2008年）「大森海苔のふるさと館」が開館した』とのこと。



1階には昭和30年代に造船されて現存する最後の海苔船 伊藤丸（全長13m）（写真左）が展示されています。

2階には海苔作りの状況が展示されています。生産用具は国の重要文化財に指定され、海苔の歴史を伝える貴重な文化遺産となっています。





手前に広がる海辺は大森 ふるさとの浜辺公園になっています。
浜辺エリアには「ひび」粗朶木（そだき）らしきものが見えました。
海苔のふるさと館の年間催し物予定には海苔つけ体験や海苔賽づくり体験
がありました。

次回は 東京に こんなところ-11 です。

平野 寅次郎 拝